教員養成ならではの大学教職員PD講座／第２講

教員養成系大学における学生気質と学生指導の課題

東京学芸大学
岩田康之・山口晶子

教員養成“ならでは”のプログラムの探究

第１講　大学における教員養成

第２講　教員養成系大学における学生気質と学生指導の課題（学生指導の課題を探り・支援する）

第３講　附属学校の役割・特色、附属学校を活用した研修
（大学での実践的指導力育成の課題と方法を学ぶ）

第４講　「師範学校」と「大学」
－近代教育と教員養成の「場」の問題

第５講　「チーム学校」と教育支援

第６講　教員養成の多様性と「質」保証

第７講　これからの大学での教員養成について考える

第８講　諸外国から見た日本の教員養成の現状と課題

第二講の柱（問い）

第１部〔岩田〕

教員養成改革の動向

－日本の教育系大学はどうなっているのか？

第２部〔山口〕

教員養成系大学の学生を知る

－HATOプロジェクトIR部門の学生調査をもとに

第３部〔岩田〕

まとめと今後の課題

－教学改善にどう活かすか？

3

本日のPD講座（第2講）で身につけたい力
―「専門職開発プログラム8つの力」のうちの3つの力―

本講座に該当する「3つの力」	その下位項目
Ⅲ　教員養成カリキュラムの実際を知り、創り変える力	自大学の教員養成に関わる理念と方針、AP・CP・DPに対する理解
	自大学の教員養成カリキュラムの現状と変遷に対する理解
	他大学の教員養成カリキュラムに対する理解
	教育科学・教科教育・教科専門の教員のそれぞれの視点と強みに対する理解
Ⅳ　教育実習関連科目の現状と在り方を変える力	自大学の教育実習関連科目（教職入門、基礎実習・応用実習、教職実践演習等）の現状に対する理解
	他大学の教育実習関連科目の現状に関する理解
	国内外の教育実習のあり方に対する理解
	海外教育演習（模擬授業等含む）の開発と運営に対する理解
Ⅴ　教職志望の学生の気質と生活の特徴、学習スタイルを探る力	教職志望学生の気質と生活、学習スタイルに対する理解
	学生の出口並びにキャリア教育に対する理解
	学生の多様性（ダイバーシティ）に対する理解
	学生の特徴を生かした授業づくりに対する理解

第1部

教員養成改革の動向

1980年代以降の「抑制策」

「計画的な人材養成が必要とされる分野のうち、医師、歯科医師、獣医師、教員及び船舶職員の養成についてはおおむね必要とされる整備が達成されているので、その拡充は予定しない」

（1984.6 大学設置審議会大学設置計画分科会報告書「昭和61年度以降の高等教育の計画的整備について」）

削減のされ方

	ピーク時定員（抑制前）／年度		ボトム時定員（抑制後）／年度		削減率	削減数
医学部（医学科）	8,280	1981	7,625	2007	7.9%	655
歯学部	3,380	1985	2,460	2014	27.2%	920
教員養成系学部	20,150	1985	12,850	2017	36.2%	7,300
（内 教員養成課程）	20,150	1985	9,390	2005	53.4%	10,760

「抑制」五分野のその後

教員：2005年度から抑制策全面撤廃

医師：2016年度 東北医科薬科大学医学部

←震災復興、地域医療の振興等を目的に、文部科学省が東北地方に一校を特例的に認可。宮城県仙台市

2017年度 国際医療福祉大学医学部

←国家戦略特区。千葉県成田市

獣医師：2018年度 岡山理科大学獣医学部

←国家戦略特区。愛媛県今治市

船舶職員・歯科医師：抑制策継続

学問分野別「ミッションの再定義」にみる「各大学の特色・強みを生かした機能強化の例」

（「国立大学改革プラン」pp.20-22）

学問分野	機能強化の例・考え方
医学	先導的な人材育成機能の強化 社会の課題解決や産学官・大学間連携 グローバル化の推進、国際貢献 最先端の研究・開発機能の強化
工学	工学分野の研究論文の量・質ともに世界的水準にある 工学・関係分野の研究論文の量又は質が世界的水準にある 個別の分野に高い研究実績や特色を有する
教員養成	教職大学院への重点化等（新課程の廃止など組織編成の抜本的見直し） 実践型のカリキュラムへの転換（学校現場での実践的な学修の強化） 学校現場での指導経験のある大学教員の採用増

ざっくり言うと

- 国立の、教員養成系大学・学部の教員養成課程は、1980年代以降の日本の高等教育政策の中で一貫して、規模の縮小を要請され、これに応じてきた。
- 一方で、教員養成（特に小学校）に関しては、21世紀に入って以降の新自由主義的諸施策の中で、規制緩和（市場開放）が進んだ。
- そうした中で、近年の教員養成系大学・学部は「教育について幅広く学ぶ場」から「実践的な教員を養成する場」へと軸を移しつつある。

↓

そのような、イマドキの教員養成系大学には、どういう学生が入り、どういう意識で学んでいるのだろうか？

「学ぶ側」にとっての教員養成カリキュラム
（諏訪、2013）

- 大学における教員養成カリキュラムの問題点と改善へ向けての課題

- ①新卒新任者と学部生との間で、リアリティ・ショックに対する意識差はあまり見られない。

- ②評価の高い科目は実践的諸科目で、自由記述のキーワードとして「指導案」「現場体験」「教育の現実」があがる。また、授業担当者として「実践経験のある指導者」を望む。授業内容に関しては、模擬授業やグループワークを好み、座学・講義を否定する傾向がある。

  →教員養成機関が限りなく「専門学校」と化している。

  学士学位を持つ人材を教員の基礎資格としていることの意義、

  「学識ある専門職」としての教養の大切さを失っている。

- ③教員養成を行う大学においても、大学教育の他分野と同様、教授法の改善が急を要する課題である。

②について、学生調査を用いてさらなる検証をしてみたい

第２部

教員養成系大学の学生を知る

―HATOプロジェクトIR部門の学生調査をもとに―

IRの定義と方法

IRとは何か―学生に誠実に向き合うために

- IR（Institutional Research）とは、高等教育機関が教育活動やマネジメント、財政等に関わるデータの分析・管理を行うことを通じて、エビデンスに基づく経営戦略の策定や教育プログラムの点検、改善につなげていく調査活動を行うこと

（教員養成開発連携機構（2015）p.10）

- IR実践の５つのステップ
  調査設計→データ収集→分析前準備→分析→情報提供

（中井俊樹他（2013）p.21）

学生に対する「愛がある」＝IR　…というフレーズが覚えやすいですね！

HATOプロジェクトIR部門の調査

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
１年生	新入生学習調査	新入生学習調査	新入生学習調査	新入生学習調査	新入生学習調査
２年生		大学生学習調査	大学生学習調査	大学生学習調査	大学生学習調査
３年生			大学生学習調査	大学生学習調査	大学生学習調査
４年生				大学生学習調査	大学生学習調査
４年生・卒業			卒業時調査（試行）	卒業時調査	卒業時調査

HATO４大学では、「**教学改善**」を目標に、
調査を計画・実施してきた。

HATOプロジェクトIR部門の調査方法

- 質問紙調査は「学籍番号」を記入してもらい、同一人物の変化を追跡可能にした。

- 4大学の実施時期を可能な範囲でそろえ、各大学がもっとも実施しやすい方法で行った。
  ①新入生学習調査・大学生学習調査は「オリエンテーション時」に実施。
  ②卒業時調査は、「卒業式」に実施。

  →オリエンテーションや必修授業等に「参加しない学生」こそ、支援対象であるという見方も重要。IRはあくまで「全体の傾向」を把握するという点に限界があり、回答していない学生への目配りも要する。

- 学年が上がるとともに、回収率が低下する傾向にある。

教員養成系大学生の
教員志望

「教員志望」の問い方

Q.　あなたの教員採用試験と教職志望の関係についておたずねします。

（1つのみ回答）

1. 教員採用試験の合否に関係なく、どうしても教員になりたい。
2. 教員採用試験に合格すれば教員になるが、不合格の場合は他の職種に就く。

志望

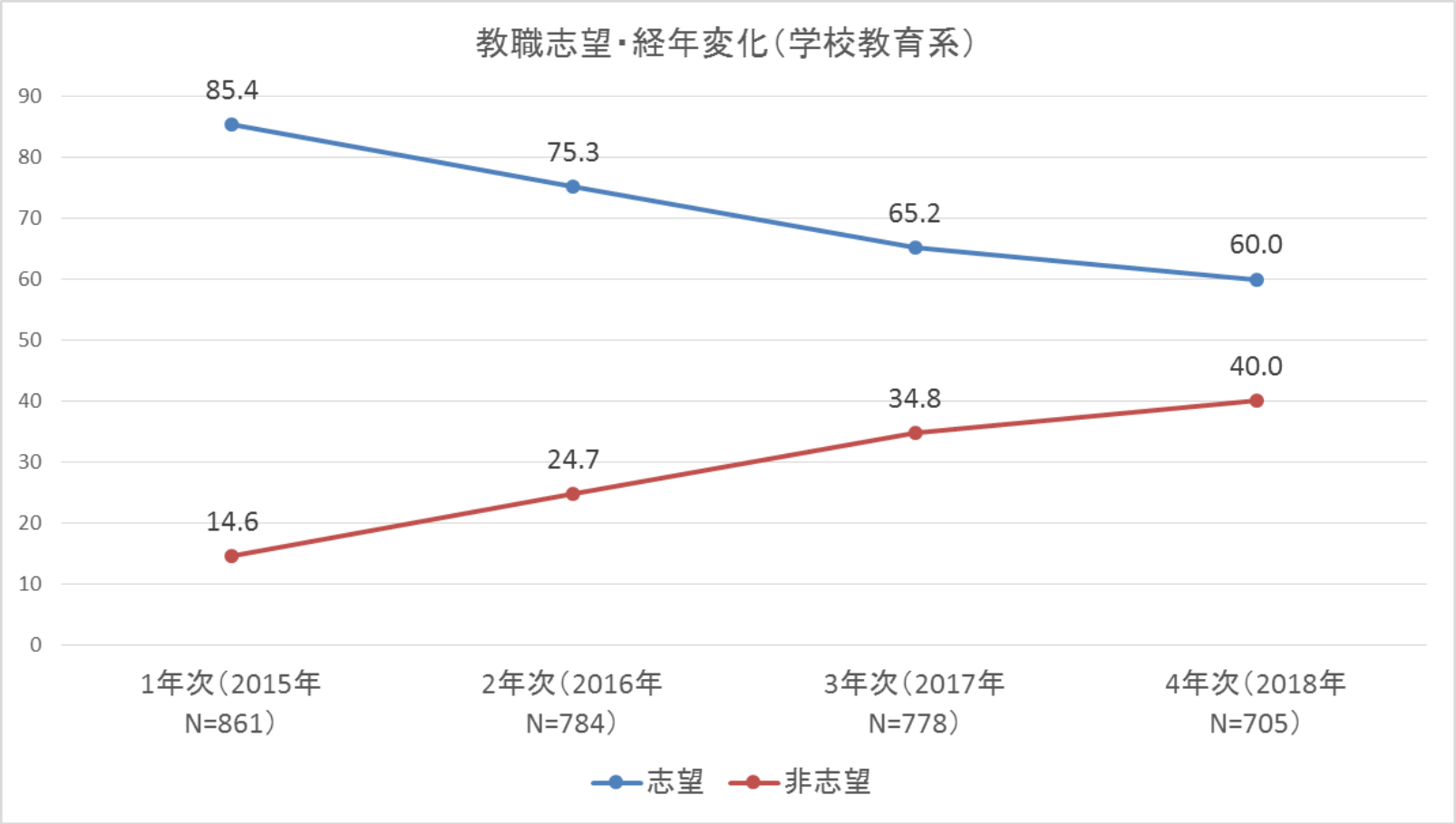
3. 教員採用試験は一応受験するつもりだが、第1希望の職種は別にある。
4. 教職以外の仕事に就きたいので、教員採用試験は受けないつもりだ。
5. 大学院などの進学を考えている。
6. その他

非志望

教員志望の経年変化
（HATO4大学、教員養成課程・非課程の合計）

	2014年：1年生（N=4135）	2015年：2年生（N=3505）	2016年：3年生（N=2017）	2017年：4年生（N=2832）
教員志望	70%	55%	57%	51%
教採を受験するが、第一希望の職種は別	13%	13%	10%	7%

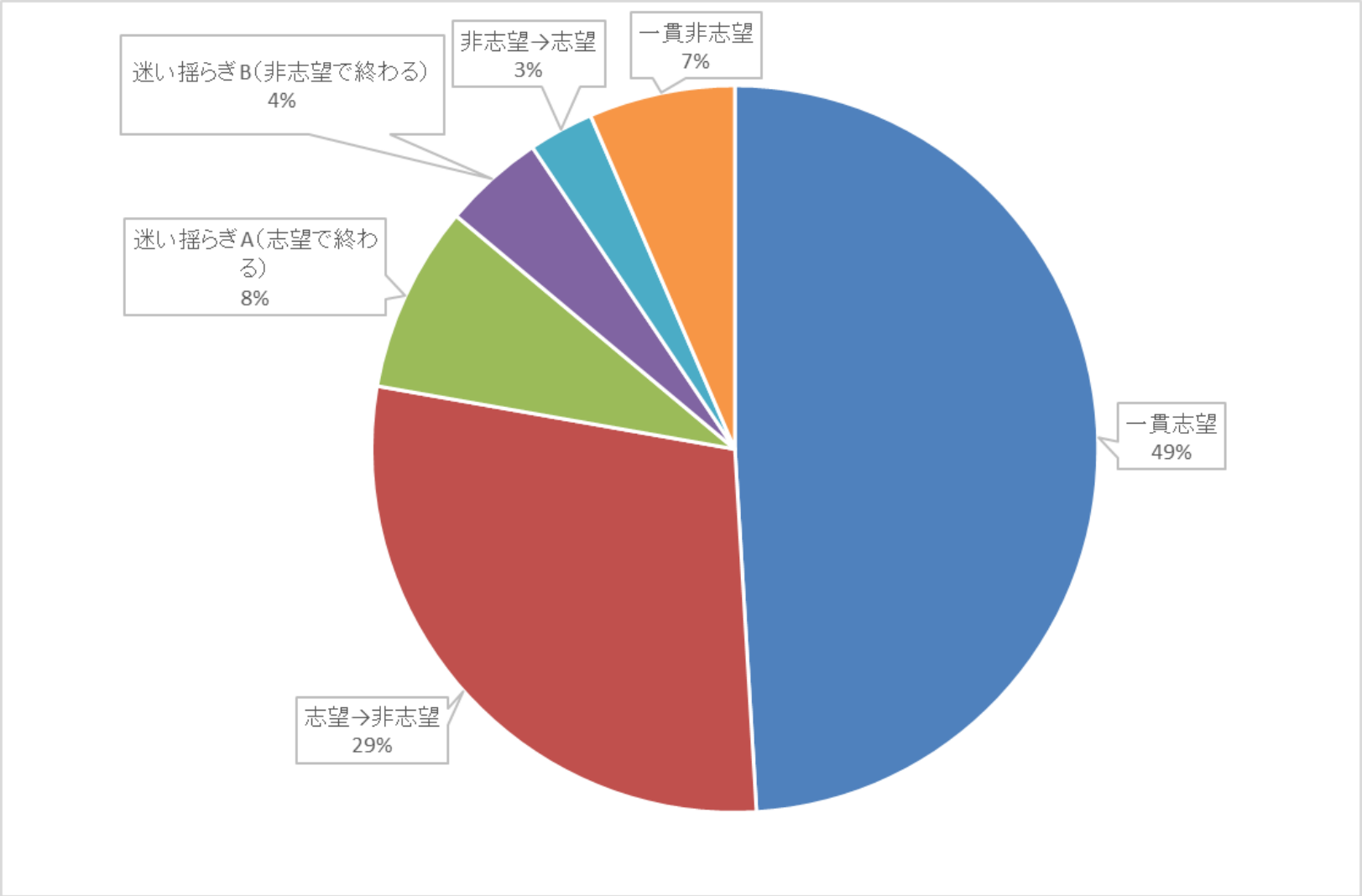
東京学芸大学　2015年～2018年調査
（学校教育系のみ）



教員志望の6類型
東京学芸大学　2015年～2018年調査
（学校教育系のみ）

類型	パターン			
一貫志望	志→志→志→志			
志望→非志望	志→非→非→非	志→志→非→非	志→志→志→非	
迷い揺らぎA（志望で終わる）	志→志→非→志	志→非→志→志	志→非→非→志	非→志→非→志
迷い揺らぎB（非志望で終わる）	志→非→志→非	非→志→志→非	非→志→非→非	非→非→志→非
非志望→志望	非→志→志→志	非→非→志→志	非→非→非→志	
一貫非志望	非→非→非→非			

6類型の分布


迷い揺らぎB(非志望で終わる)
4%
非志望→志望
3%
一貫非志望
7%
迷い揺らぎA(志望で終わる)
8%
一貫志望
49%
志望→非志望
29%

【参考】国立教員養成系大学の就職状況

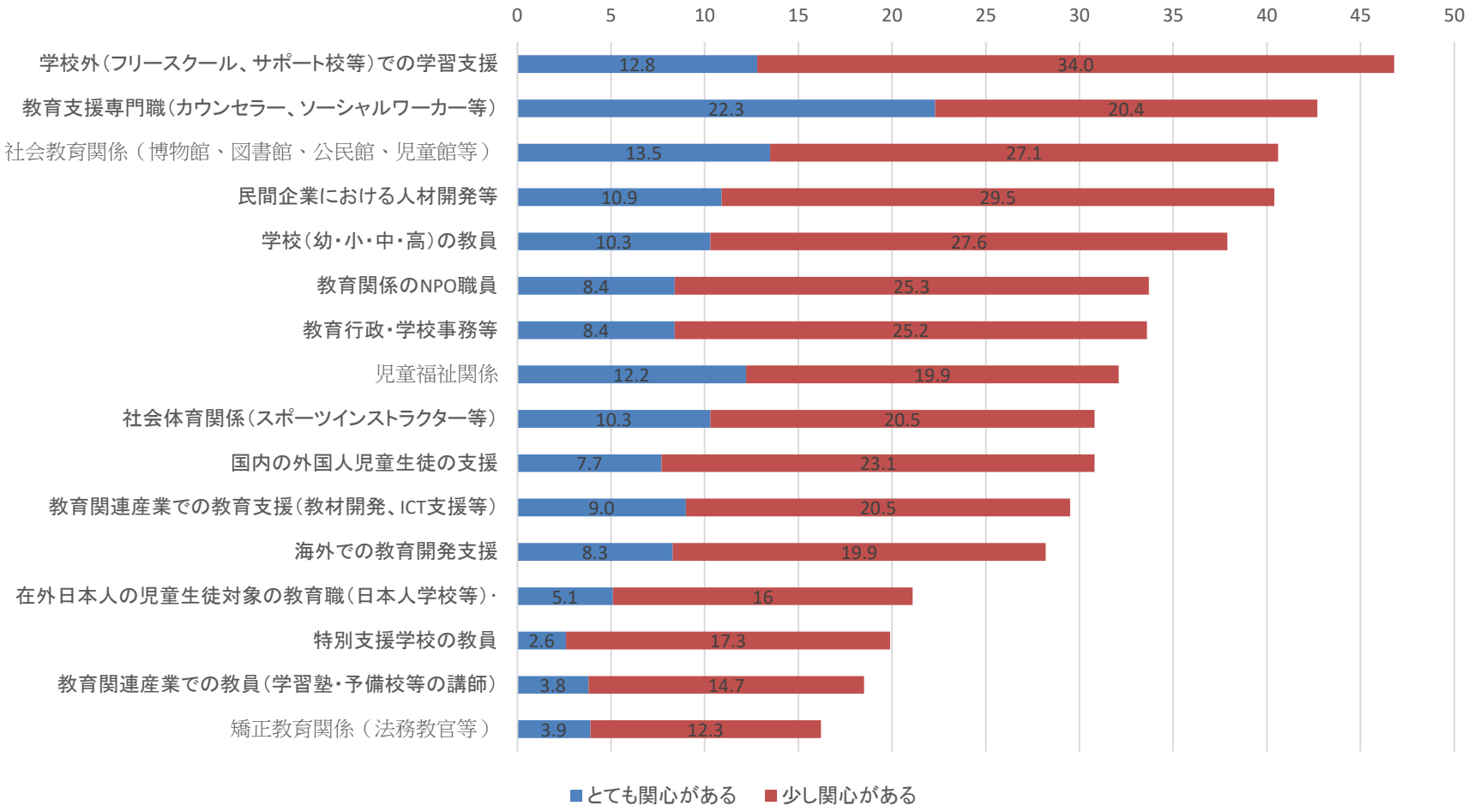
文部科学省
「国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の
平成31年3月卒業者及び修了者の就職状況等について」より

- H31年3月卒業者の教員就職率は**58.4%**

- 卒業者から大学院等への進学者と保育士への就職者を除いた
教員就職率は**65.7%**

※正規採用、臨時的任用を含む

非教員養成課程の学生の関心のある職業
（東京学芸大学、2018年調査3年生）



教員免許取得者に期待される教員以外の業種・職種（蔵原、2002）

①学校教育を補完する仕事・教育機関
（学校相談員、塾・予備校、フリースクール）

②スポーツインストラクター・お稽古事の教師

③教育関連図書出版や教育機器関連業

④福祉・NGO関連

⑤一般企業（直接子どもに接する業種、社内教育にかかわる業種）

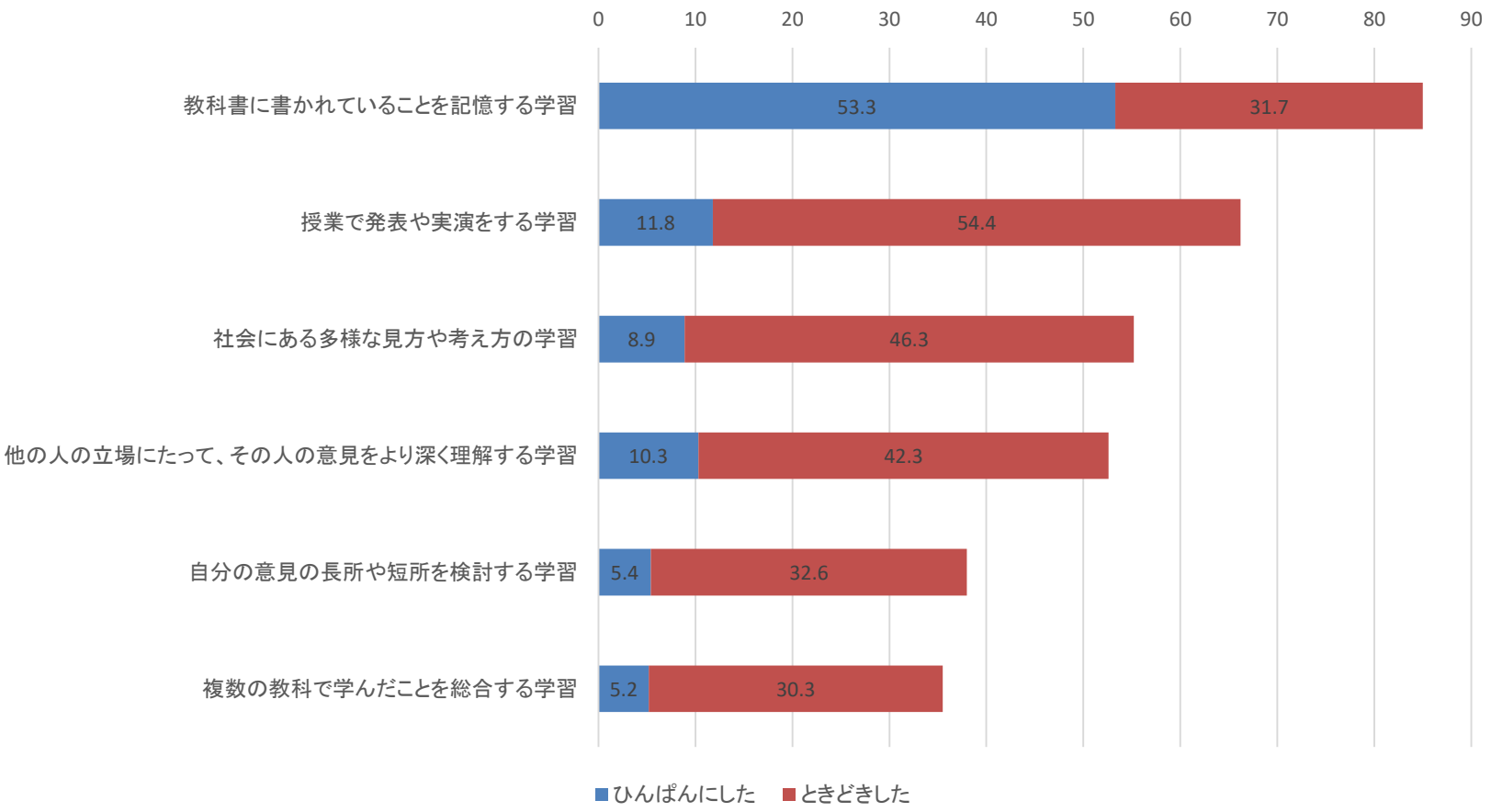
東京学芸大学　教育学部教育支援系
（2015年度より設置）
アドミッションポリシー

- 本課程では，教育の基礎知識と教育支援の専門知識，ならびに協働力・ネットワーク力・マネジメント力を習得することを通じて，学校現場と協働して，様々な現代的教育課題の解決を支援する意欲と能力を備え，自ら考え行動できる教育支援人材を養成します。

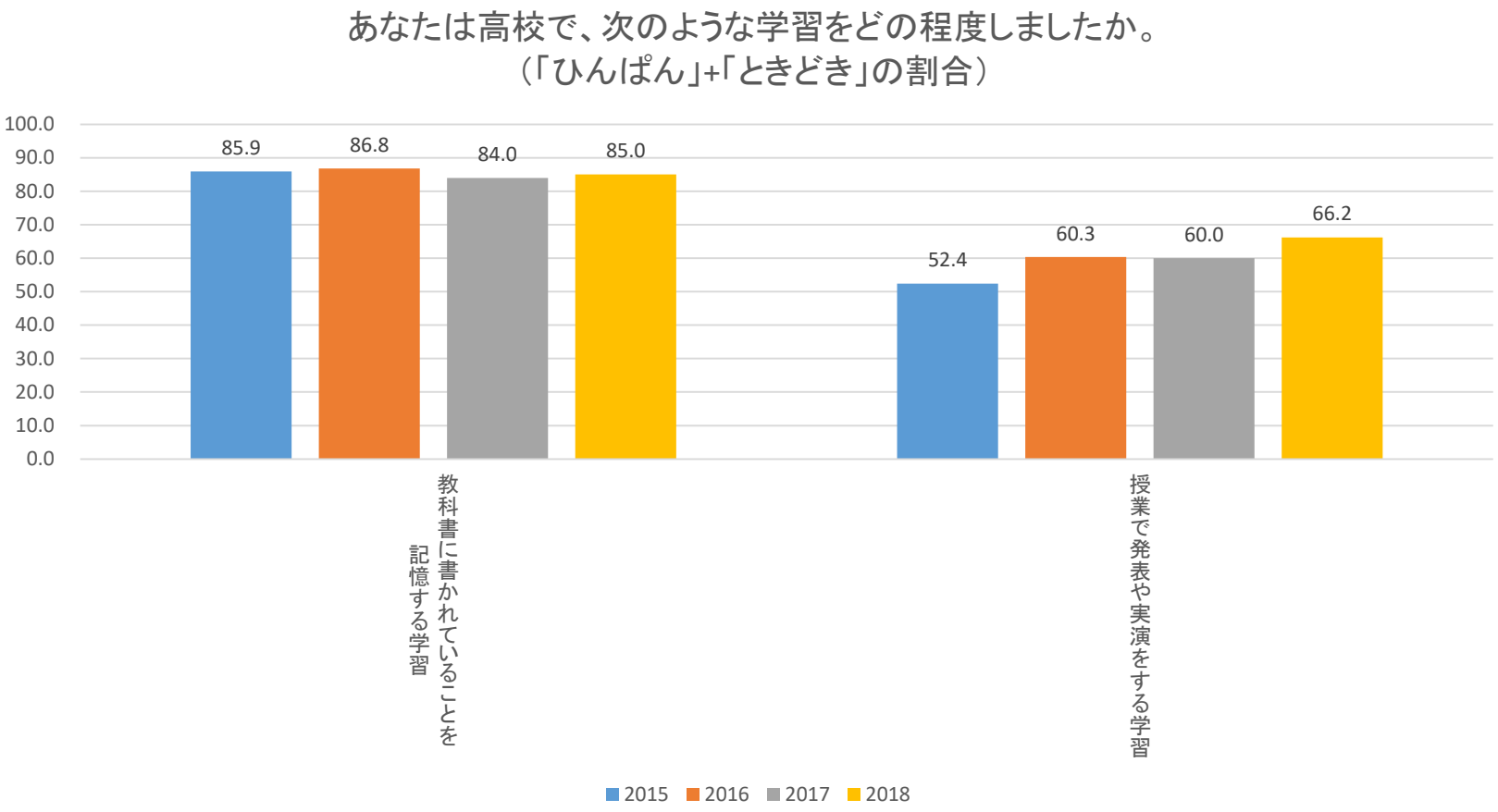
- そこで本課程では，このような教育理念に共鳴するとともに，様々な教育現場をフィールドにして高度の実践力を身につけ，将来，**学校，地域，教育行政，教育関連企業，教育関連NPO等の場で教育支援人材として活躍する**ことに，強い意志と意欲を持って学ぼうとする人を求めています。

教員養成系大学生の
学習

高校時代の学習
（東京学芸大学　新入生学習調査2018）



「授業で発表や実演をする学習」を経験している学生が増えてきている
（東京学芸大学　新入生学習調査2015-2018）



新入生学習調査にみる高校時代の学習

- 「教科書に書かれていることを記憶する学習」が多い
- 「複数の教科で学んだことを総合する学習」「自分の意見の長所や短所を検討する学習」が少ない
- グローバル化対応の視点から課題になるのは、高校時代に「海外の研修プログラムに参加する」経験の少なさ

教員養成系大学における学習の意義

・大学での学習を通じて、「教科書に書かれていることを記憶する学習」以外の学習スタイルを経験しないと…

・「教科書に書かれていることを記憶する学習」を単に再生産するだけの教員を量産してしまうおそれがある。

・学生の授業観・学習観をゆさぶる機会を、大学は提供できているだろうか？

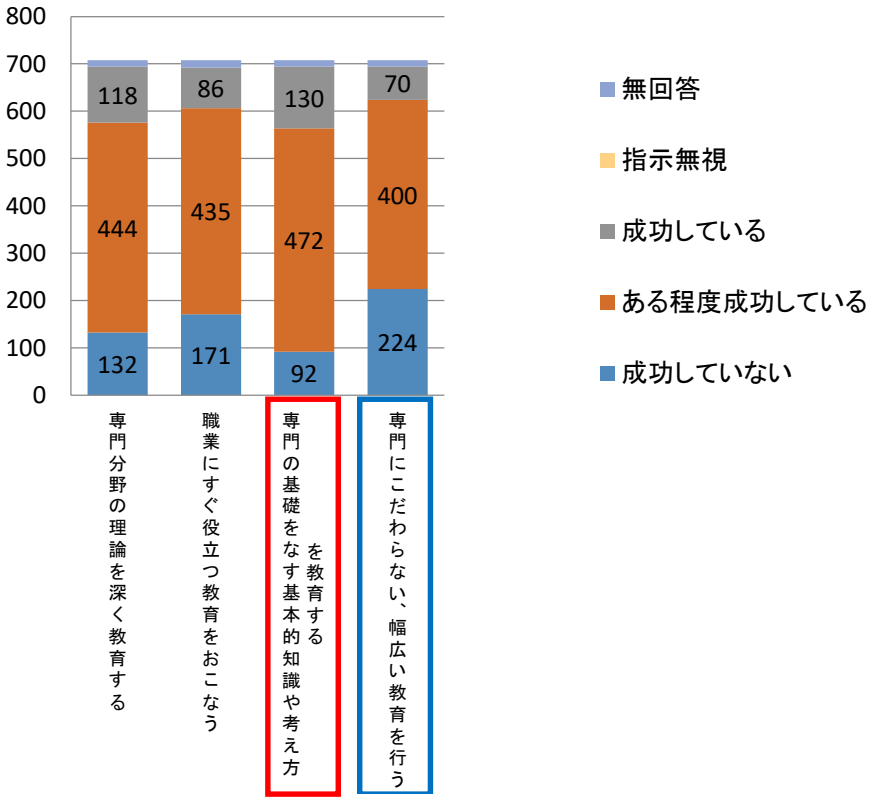
高校時、大学入学後の学習の変化
（HATO4大学、2014年新入生と2017年大学生4年生の比較）

高校		大学
87%	教科書に書かれていることを記憶する学習	61%
68%	問題の解決方法を捜して、他の人に説明した	57%
44%	授業中、質問した	34%
45%	授業で発表や実演をする学習	79%
26%	複数の教科で学んだことを総合する学習	44%
47%	他人の立場にたって、その人の意見をより深く理解する学習	62%

大学教育の「現在」に対する学生の評価（東京学芸大学、2016年3年生）

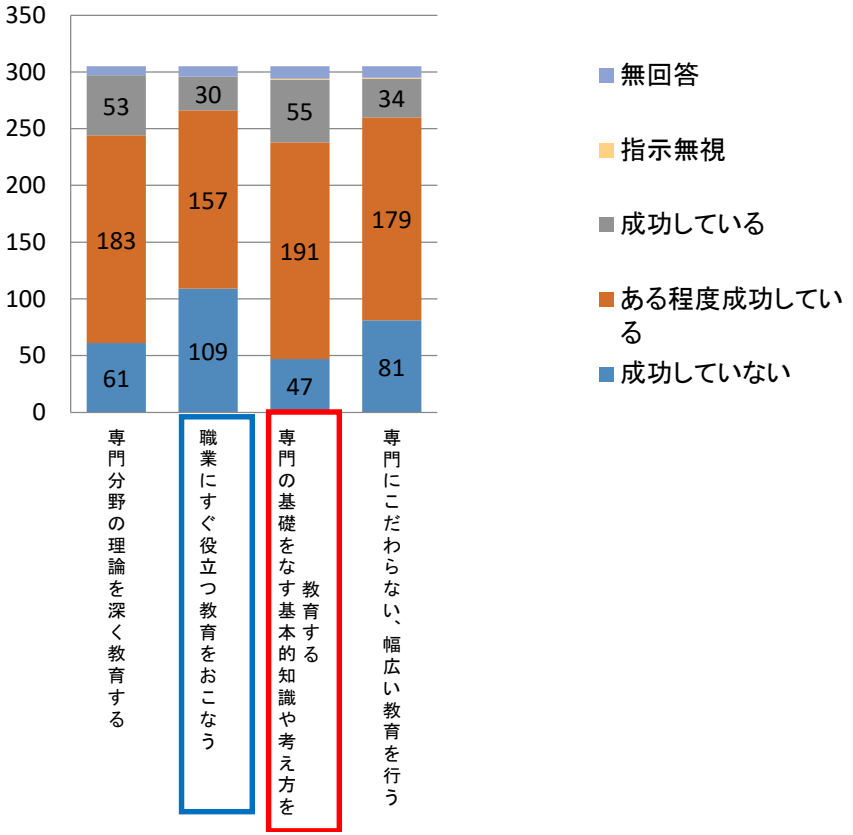
教育系

〔11〕A 現在の評価



教養系

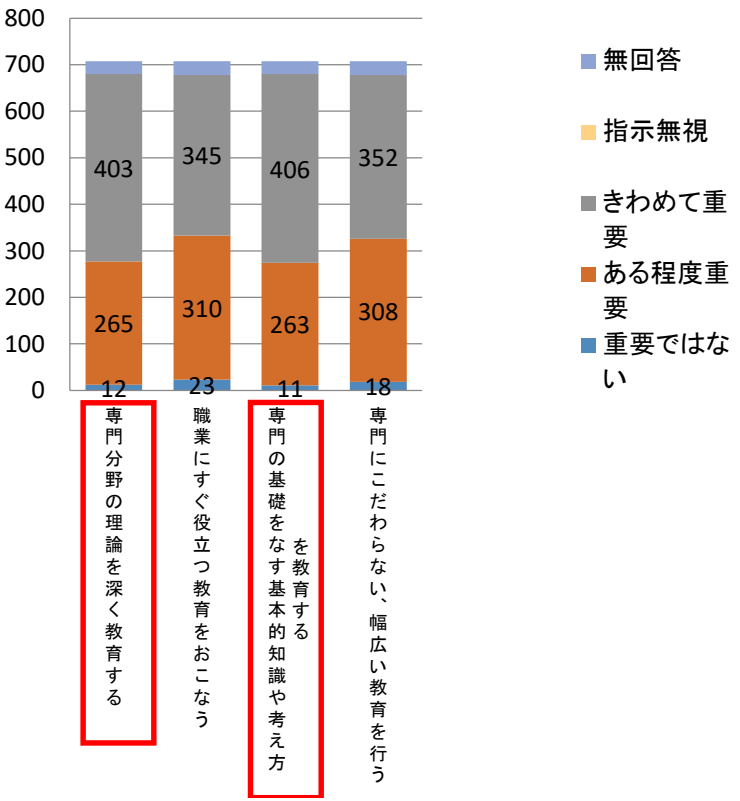
〔11〕A 現在の評価



大学教育の「将来のありかた」に対する学生の評価（東京学芸大学、2016年3年生）

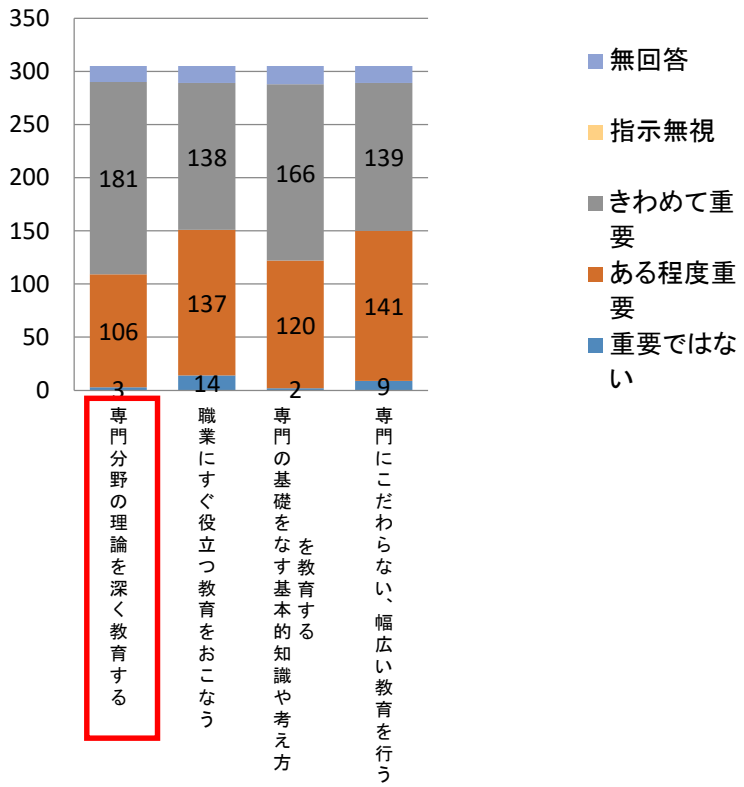
教育系

〔11〕B 将来のありかた



教養系

〔11〕B 将来のありかた



専門の理論 VS 職業にすぐ役立つ教育（東京学芸大学、2016年3年生）

	2年現在→3年現在 「成功している」	2年将来→3年将来 「きわめて重要」
専門分野の理論を深く教育する	19.5→17.3	62.2→60.2
職業にすぐ役立つ教育を行う	14.3→11.7	54.8→49.9
専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する	22.7→18.7	59.1→59.1
専門にこだわらない、幅広い教育を行う	12.3→10.5	52.9→50.8

「成功している」「ある程度成功している」「成功していない」
「きわめて重要」「ある程度重要」「重要ではない」の3件法

教員養成系大学生の
悩み

大学入学以降の悩み
（HATO4大学、2017年4年生調査）

「よくある」「ときどきある」の和

- 両課程（養成課程および非養成課程）の半数以上（50%台）

「授業に興味・関心がわかない」、「生活に熱意がわかない」

- 教員非養成課程（50%台）

「就職活動が思い通りに行かない」

→教員養成課程31%台に対して多い

- つまり、「授業・学習」と「キャリア・進路」に関する悩みを、学生たちは抱えている

教員養成課程の学生の悩み
―教員志望者・非志望者の違い―
（東京学芸大学2016年3年生）

	教員志望者		非志望者
授業の内容についていっていない	43.1	≒	42.0
生活に熱意がわかない	49.2	<	59.2
授業に興味・関心がわかない	55.7	<	66.4
進級や卒業ができるか心配だ	30.4	<	40.4
他の学科・学部・大学や学校に入り直したい	22.4	<<	44.4
やりたいことが見つからない	31.7	<	45.1

※教員志望者・非志望者をそれぞれ100として、
「そう思うこと」が「よくある」+「ときどきある」と回答した者の割合

卒業時点における学生の
大学に対する評価

学生からの評価（HATO4大学、卒業時調査）大学の教育内容や教育環境に対する満足度

満足度
高

中

低

- 80%以上の学生が満足：
自分の専門領域に関する理解の向上、自分の専門領域に関する授業の質、1つの授業を履修する学生数

- 70%程度の学生が満足：
共通教育あるいは教養教育の授業、授業の全体的な質、多様な考え方を認め合う雰囲気、自分の専門領域に関する授業の量

- 60%程度の学生が満足：
将来の仕事と授業の結び付き（非教員養成課程）、進路・キャリアに関する支援体制

学生からの評価（HATO4大学、卒業時調査）
大学生活を通じて身についた能力

あなたは大学生活を通じて、以下の能力がどの程度身についたと思いますか。

能力
多い

中

少ない

- 70～80%の学生が「多い」と回答：
専門分野や学科の知識、人間関係を構築する能力、
分析や問題解決能力、コミュニケーションの能力

- 60%程度の学生が「多い」と回答：
一般的な教養、卒業後に就職するための準備、
プレゼンテーションの能力、文章表能力

- 50%以下の学生が「多い」と回答：
異文化の人々に関する知識、グローバルな問題の理解、
国民が直面する問題の理解

外国人児童生徒に関する課題
―「異文化」から派生する課題として―
（HATO4大学、卒業時調査）

回答者を「教員になる方」に限定した設問

カッコ内は「非常にあてはまる」「ややあてはまる」の和

- これからの教員生活において、外国人児童生徒の指導をする機会があると思う（74%）

という認識があるにもかかわらず、

- 外国人児童生徒の指導に必要な準備ができている（23%）

＜実体験の少なさ＞

- ボランティアなどを通じて、外国人児童生徒の指導をした（29%）
- 教育実習先で、外国人児童生徒と接する機会があった（32%）

教員養成系大学生のLGBTの知識・理解・学習経験に関する調査（奥村・加瀬,2017）

- LGBTに関する正しい知識を身につける**必要性**を感じている学生（95％）

- 実際に大学の授業においてLGBTについてふれた経験のある学生（33％）

☞学生のニーズと大学側の提供する教育との乖離がみられる

キャリアサポートに関する組織的課題（HATO4大学、卒業時調査）

※教員養成課程、非養成課程の双方において、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」の和が40%台以下の項目
☞組織的課題と思われる項目

- 教員以外の職業を志望する者に対して、大学のキャリアサポートは充実していると思う
- 大学のキャリアサポートの窓口で質問や相談をひんぱんにした
- 学内には、民間企業の就職に関する情報が充実していた

- 「大学においてキャリアサポートを受けられる場所を知っている」学生が7割に対して、じゅうぶんに利用しきれていない現状があるのではないか

第３部

まとめと今後の課題

本日の講義のまとめ

- 学習課題

高校時代の学習経験と異なる経験を大学は提供している。
重要なテーマに関する授業や、実践経験が不足している。

- キャリアサポート

進路やキャリア支援に関するさらなる改善を要する。

特に教員志望でない学生は、進路に関して悩んでおり、多様な進路に手厚く対応できるサポートが必要である。

教員養成系大学は、教員志望学生のさらなるサポートをするとともに、教育関連職・教育支援職へと拡張したキャリアサポートを考えていくことが望まれる。

教学改善にどう活かすか

- 基本的なこと

  →入学した全ての学生に、実り多い学びを提供し、それぞれの進路に導く。

- 入試・広報

  →「教員養成課程に入る」=「教員免許状取得のための科目が全て必修になる」(およそ1/2)というリアリティをどう伝えるか

  →「教職志望度の高い学生」を採る工夫(→入試類型とのクロスなど)

- 履修指導

  →「教員養成課程」イコール「教職志望」とみなさずに、一定数の不本意入学者、教職非志望者が存在するという前提で指導を行うべき。

  → 教職志望度を高いまま維持する学生がマジョリティではあるが、低下させる学生が、向上させる学生よりもずっと多い。教職の魅力とリアリティをどう教えるか。

  → より多くの学生に大学教育で満足を与える工夫とは？

「外側」の課題

- 教育職員免許法や、時々の高等教育政策に従属せざるを得ない「宿命」を持った学部
  → あらかじめ制約された裁量幅の中で、どれだけ学生に満足できる教育を与えられるか？
- 経年変化を追えない学生の存在
  → オリエンテーションに出ない、指導教員の呼び出しに応じない学生たち。こうした学生たちこそが、実はきめ細かなケアの対象とすべき。
- 他大学との比較
  → 他の教員養成系大学
  → 他の一般大学（ジェイ・サープ等）

グループワークの提案

- 教員と職員によるグループワーク
- 「学生に関わる課題にはどのようなものがあるでしょうか。ご自身のお仕事との関わりから、お考えください」
- 学生に関する諸課題の共有

  ＜個別具体的な課題の洗い出しから、問題の類型化へ＞
- 改善策の模索を協働的に行う。
- 学生のさらなる成長を目指して、いかなる教学改善策及び学生支援策、さらにはカリキュラム・入試・広報等も含めた大学全体の戦略のあり方があるのか。
- 教職員のそれぞれの専門的視点から議論し、多面的なアプローチの可能性を検討する。
- 最後に議論の内容の共有、さらなる議論を！

参考ウェブサイト

- 文部科学省「国立大学改革プラン」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1341970.htm

- 文部科学省「教員養成分野のミッションの再定義」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1342089.htm

- 東京大学 大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」

http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kiso2008_01.pdf

- 国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成31年3月卒業者及び修了者の就職状況等について

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoushoku/kyoushoku/1413296_00001.htm

参考文献

- 岩田康之・別惣淳二・諏訪英広編『小学校教師に何が必要か』東京学芸大学出版会、2013年.
- 奥村遼・加瀬進「教員養成系大学生が有するLGBTの知識・理解・学習経験に関する調査研究」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』68（2）,2017年,pp.1-10.
- 教員養成開発連携機構『平成26年度HATOプロジェクトシンポジウム』2015年.
- 蔵原三雪「教師以外の教育者の道」日本教師教育学会編『講座教師教育学第Ⅱ巻　教師をめざす』学文社、2002年.
- 児玉真樹子・平尾朋子「教員養成課程の学部生の教職志望に及ぼす自己効力感の影響」広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要』第１部、第63号、2014年、pp.1-8.
- 櫻井眞治「教職入門の指導と受講学生の自覚した価値の考察」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』１１、2015年、pp.51-61.
- 田中光晴「教員養成課程のグローバル化に関する動向」『東北大学大学院教育学研究科年報』第６３集第１号、2014年、pp.245-261.
- 諏訪英広「『学ぶ側』にとっての教員養成カリキュラム」岩田・別惣・諏訪編『小学校教師に何が必要か』東京学芸大学出版会、2013年、pp.76-94.
- 中井俊樹他『大学のIR　Q&A』玉川大学出版部、2013年.
- 春原淑雄「親の要因、教職志望動機および教師効力感の関連」東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科『学校教育学研究論集』第21号、2010年、pp.1-10.
- 藤井義久「教員資質能力自己評価尺度の開発」岩手県立大学『リベラル・アーツ』5号、2011年、pp.1-12.

講義を視聴していただき、
ありがとうございました。